

Study Series No. 7

March 1984

思想史研究と雑誌

杉 原 四 郎

一橋大学社会科学古典資料センター
Center for Historical Social Science Literature
Hitotsubashi University

思想史研究と雑誌

杉原四郎

はじめに——雑誌との出会い

私は1957（昭和32）年にLSE（London School of Economic and Political Science の略）に留学した。ロンドン大学の経済学部にあたることを私がえらんだ主な理由は、そこに Mill = Taylor Collection をはじめ、J. S. ミルの多くの手稿類が所蔵されていることであった。だが私はそこで、ミルに関する原資料と同時に、雑誌というものに出会ったのである。

LSE ではいくつかの図書室に専門別の図書が開架式に置かれており、自由に抜き出してそこで読むことができる。日本の開架図書室とちがうのは、単行本の他に雑誌のバックナンバーがずらりとならんでいることで、経済学の部屋には、*Economic Journal*, *Review of Economic Studies*, *Economica* など、主要な雑誌が創刊号以来そなえられていた。これらの雑誌は日本の大学にもあるが、バックナンバーは書庫の中に所蔵されているのが普通である。読みたい論文を検索するために書庫に入り、それが掲載されている雑誌の当該号を借り出してくる。私もしばしばそうしたが、その場合私に必要なのは論文であって雑誌ではなかった。論文の載っている雑誌の編集者が誰で、寄稿者達がどういう顔ぶれで、どんな特色、影響力をもち、創刊以来どんな歩みをつづけてきたのか、といったことは問題でなかった。したがって雑誌のバックナンバーが開架になってなくても、さして不便を感じなかった。

LSE の図書室でハイエクの論文の載っている *Economica* を書棚からとり出して読んだ——彼がミルとテイラーとの往復書簡を編集する仕事をしたのは LSE にいた時期である——ときもそうであった。だが私はその論文を読んだあとすぐには雑誌を返さずに、しばらくその号や他の号を何となくひろい読みしてゆくうちに、当時の LSE の学問的雰囲気とその誌面に反映していることに気づいた。1930 年代の LSE には、ハイエクの他にヒックスもいた——この二人が戦後ノーベル経済学賞をうけたことはよく知られている——し、理論ではロビンズ、歴史ではトニーと、錚々たるスタッフがそろっていて、世界の経済学界の一中心を占めていたことが、当時の *Economica* の充実ぶりに反映している。その *Economica* の巻末に *Politica* という政治学の雑誌の広告がでているのに気がつき、やはり図書室にならんでいるそのバックナンバーをとり出してのぞいてみると、LSE にいたラスキが編集している雑誌のようであった。そこには思想史研究者にも興味をそそるテーマの論文がのっており、全体としてプロレイバー的な傾向が感じられた。そして、1930 年代の LSE と LSE がリードしていた当時のイギリスの学界・思想界を知るには、*Economica* だけでなく、その姉妹誌である *Politica* をも視野に入れる必要があることがわかった。⁽¹⁾私と雑誌との出会いはこのようにして始まったのである。

一般に学術書にくらべての学術雑誌の相対的な重みは、自然科学よりも人文・社会科学の方が低い、そのうえわが国では、社会科学の分野で日本全体を代表するような、また編集権や投稿規定が確立しているような雑誌に乏しい（*Economica* や *Politica* は LSE の雑誌であっても、わが国の

諸大学の機関誌とちがって、そこのスタッフだけが書く封鎖的なものでは決してない)ので、雑誌論文というものは、書き手にとっても読み手にとっても、やがて学術書にまとめて公刊される前段階の試論的性格のものだと見られる傾向がある。そうした見方がわが国の図書館における雑誌の取り扱い方にも反映して、LSE のように開架式の書棚のスペースを雑誌のバックナンバーでうずめるようなことはあまりなされない。

だがこうした日本とイギリスのちがいは、単に学術雑誌だけではなく、雑誌一般についてもあてはまるということがだんだんわかってきた。そしてイギリスの近代思想史の潮流をたどってゆくうえには、雑誌というものが非常に大切であること、とりわけミルのように1820年代から1870年代にかけて当時の主な評論雑誌の多くにかかわりをもった人物の研究にとっては、ミルの著書だけを見ていたのでは不十分で、雑誌そのものの研究が必要不可欠であることがわかってきた。たとえばやはりLSEの図書室の開架に*Fortnightly Review*の創刊号(1865年5月)以来のバックナンバーがならんでいたが、この雑誌は晩年のミルがいくつかの重要な論稿をよせているだけでなく、彼の死後にもその遺稿 *Chapters on Socialism* が掲載される(1879)など、ミルと関係の深い雑誌の一つである。この雑誌も私ははじめて見るわけではなかったが、日本では1860, 70年代の各号を追ってゆくことはしなかった。だがLSEでその時代の号を書棚からとり出して概観してゆくと、当時の思想界の動向がその誌面に反映されていることがよくわかり、私の興味をそそった。こうして私は、留学中の仕事の重心を、ミルの草稿や手紙などの原資料を読むのに時間をついやすことから、ヴィクトリア時代のイギリスの諸雑誌の動向をミルとのかかわりを中心に調べることに移すことにした。

このようにして私は19世紀のイギリスの雑誌について手さぐりの勉強をはじめたが、その過程で知ったのは、主な雑誌についてはすでにいくつかの研究書がでており、それらが雑誌の基本性格や主な執筆者の寄稿ぶりをつかむのに非常に役立つということであった。たとえば初期の*Fortnightly Review*についてはE.M. Everettの*The Party of Humanity, The Fortnightly Review and Its Contributors 1865—1874* (The University of North Carolina Press, 1939)があるし、初期の*Westminster Review*についてはG.L. Nesbittの*Benthamite Reviewing, The First Twelve Years of the Westminster Review 1824—1836* (Columbia University Press, 1934)がある。ミルと最も関係の深かったこの二つの雑誌についてのモノグラフィーによって、私はどれだけ有益な知識をあたえられたかわからない。こうした書物は他の雑誌にもいくつかあり、これらの研究書が図書館のレファレンス・コーナーにそなえられていて、容易に利用しうろくなっていることがありがたかった。私はイギリスの図書館で、雑誌そのものとともに、雑誌研究のガイドブックにも出会ったのである。⁽²⁾

私が関心を持っている思想家として、ミルの他にマルクスと河上肇があるのだが、思想家の研究に雑誌を忘れることができないという点では、この三人は全く同じである。彼らはいずれも、単に多くの雑誌への寄稿者だっただけでなく、雑誌の主筆または編集者としても当時のジャーナリズムと深い関係をもっていた。しかもその関係の仕方が彼らの思想形成に重要な意味をもっているのである。そこでこの点をミル、マルクス、河上肇の順に見てゆくことにしよう。

(1) *Economica*は1921年に創刊され今も刊行されている。1933年までは*A Journal of the Social Sciences*という副題がついていたが、*Politica*が1934年創刊されたのを機にこの副題がとれ、*Economica*はNew Seriesとして再出発する。*Politica*は1939年に終刊となるが、LSEの社会学者たちが編集している*The British Journal of Sociology*が1950年に創刊され、Routledge and Kegan Paulから発行された。現在

の LSE を知るためには *Economica* の他にこの雑誌をあわせ見る必要があろう。

(2) 雑誌の研究にとって全巻復刻が出ることは朗報だが、(1)総目次が提供されることや、(2)無署名または匿名の論文の筆者を確定する作業が行われることもありがたい。19世紀イギリスの雑誌について、*The Wellesley Index to Victorian Periodicals 1824-1900*, edited by W.E. Houghton, University of Toronto Press, I, 1966, II, 1972 は(1)の期待にこたえるもので、20種の雑誌の総目録と、寄稿者目録およびイニシアル・筆名索引とをふくんでいる。また(2)については、筆者確認作業を *Edinburgh Review*, *Quarterly Review* および *Blackwood's Edinburgh Magazine* についておこなった F.W. Fetter のつぎの三論文が貴重な貢献で、成果は前掲の *Wellesley Index* にもとり入れられている。

The Authorship of Economic Articles in *Edinburgh Review*, 1802-47. *Journal of Political Economy*, June 1953.

The Economic Articles in the *Quarterly Review* and their Authors, 1809-52, I, II. *Journal of Political Economy*, Feb. and April 1958.

The Economic Articles in *Blackwood's Edinburgh Magazine*, and their Authors, 1817-1853, *Scottish Journal of Political Economy*, June 1960.

なお Fetter のつぎの論文をも参照。

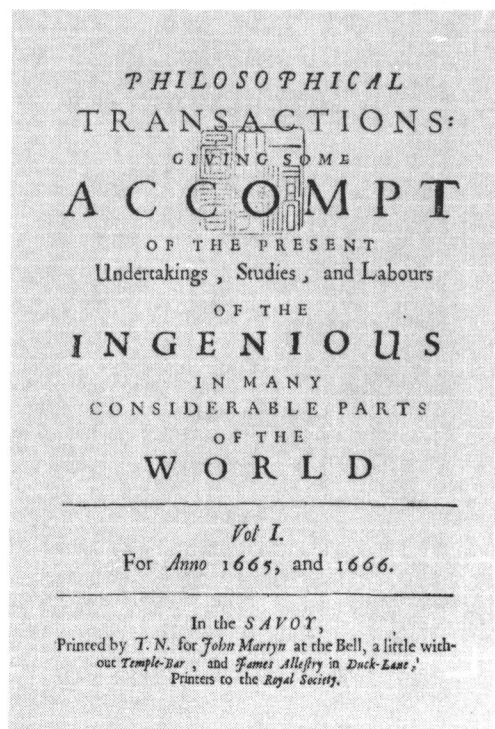
Fetter, F., Economic Controversy in the British Reviews, 1802-1850, *Economica*, Nov. 1965.

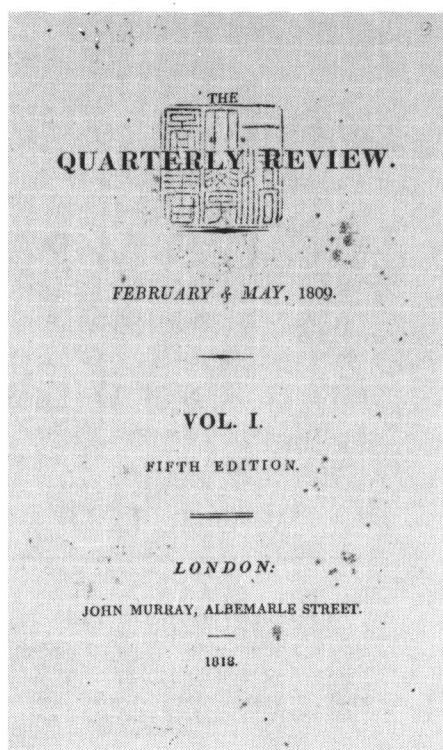
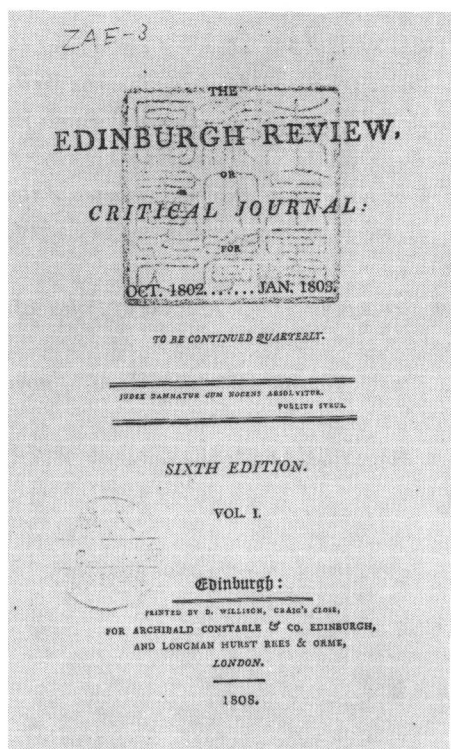
1. J. S. ミルと雑誌

主題に入るまえに、雑誌の定義とその歴史について一言しておこう。

雑誌は新聞とともに、書籍とちがって定期的・継続的に出版される定期刊行物 (Periodical) であるが、新聞とくらべると発行の時間的間隔が長い。具体的にいうと、新聞が日刊が普通、せいぜい3日刊乃至週刊であるのに対し、雑誌は季刊または月刊が普通で、時には年刊、半年刊または半月刊、旬刊、週刊などのこともある。一般に新聞や雑誌のようなコミュニケーション・メディアは、情報伝達、意見伝達、娯楽提供の三つの機能をもつとされるが、発行間隔の長短からして、新聞では情報の、雑誌では意見の伝達 (評論雑誌) や娯楽の提供 (文芸雑誌) が重きをなすことになる。⁽¹⁾

このような雑誌は17世紀の西欧ではじまった。普通最初の雑誌とされるのはフランスのデニ・ド・サロが1665年1月に創刊した *Journal des Sçavans* で、その内容はヨーロッパ各国の新刊書の紹介である。⁽²⁾ それにほんのすこしおくれで1665年3月にイギリスでオルデンブルグが出した *Philosophical Transactions* は世界各地での新しい実験や研究についての情報を提供している。⁽³⁾ いずれ





も知識人に当時世界的な規模で急速に進んでゆく学問研究の動向を伝達して知識の交流をはかろうとするものだが、初期の雑誌がこうした性格を持つことは日本でも同様で、わが国最初の雑誌とされる柳河春三の『西洋雑誌』（1867、慶応3年10月）も、「西洋諸国月々出版マガセインの如く、広く天下の奇説を集めて、耳目を新にせんが為」（編集後記）とあるように、主にオランダの学術雑誌の抄訳からなっている。⁽⁴⁾

時代がすすむにつれて、知識人を対象にした雑誌からより広い読者を対象とする雑誌が登場するようになる。そして18世紀には各国で一方では政治的色彩をおびた評論雑誌が、他方では文芸雑誌が登場する。イギリスでは1704年にデフォーが発行した *A Weekly Review of the Affairs of France*（1706年に *A Review of the State of the English Nations* と改称）が、またこれに対抗して Jonathan Swift の *The Examiner* が創刊された。前者が Whig の、後者が Tory の立場である。文芸雑誌で名をなしたのはアディソンの *The Spectator*（1711—1714）で、さらにケーズが1731年に創刊した *The Gentleman's Magazine* が成功した。本誌は文芸雑誌というよりも文芸中心の総合文化雑誌ともいべきもので、その内容の豊富さが成功の原因であり、多くの模倣雑誌が輩出した。それにややおくれて *The London Magazine* が、またエディンバラで *The Scots Magazine* が出る。そしてグリフィスの *The Monthly Review*（1749—1845）が登場する。magazine でなく book-review を主体とする新しいタイプの雑誌であって、それが時代の要望にこたえたのか急速に発行部数が増え、やがて「reviewの時代」といわれる19世紀をむかえるのである。⁽⁵⁾

当時の多くの評論雑誌の中で代表的なものは、Whig の立場に立つ *Edinburgh Review*（1802年創刊）と、Tory の立場を代弁する *Quarterly Review*（1809年創刊）とであったが、ピータールー事件（1817年）の前後に出現した多くの新雑誌が代表する改革待望の世論には両誌とも十分に対応することができなくなっていた。両誌に対抗し

うような強力な執筆陣と、明確な改革のヴィジョンをもった編集者とによる新しい雑誌の出現が期待された。この要望にこたえたのが、哲学的急進派の人々を中心として1824年1月に創刊された⁽⁶⁾*Westminster Review* だったのである。

ベンサムがスポンサー、パウリングが主筆のこの新雑誌の寄稿者の中心人物は、ジェームズ・ミルであった。息子のジョンも父と協力して執筆陣に加わって奮闘したが、⁽⁷⁾そのことは彼の『自叙伝』第4章「1823-1828年」に力をこめて語られている。だがやがて彼に mental crisis がおとずれ、その克服の過程でジョンの思想は狭量なベンサム主義から脱皮してゆく。そして父の死(1836年)を契機として新しい思想的立場に立った子のミルは、みずから主宰することになった第二次の*Westminster Review* — それは *London Review* の創刊(1836)に端を発し、やがて *London and Westminster Review* にうけつがれてゆく — の誌面をカーライルやスターリングといった哲学的急進派以外の人々にも解放するとともに、みずからもベンサム論やコールリッジ論などの重要な論文をかき、「哲学的急進派をセクト的ベンサム主義だという非難からまもる」(『自叙伝』、岩波文庫、187ページ) ことに努力した。1840年頃に彼はこの雑誌からはなれ、*Edinburgh Review* への寄稿をはじめが、そうした経過もまた『自叙伝』の第6章「1830-1840年」でくわしくのべられている。

それ以降ミルはふたたび自分の雑誌をもつことなく、死の直前まで種々の雑誌への寄稿をつづけてゆく。ところで半世紀をこえる文筆生活の間に発表した論稿はおびただしい数にのぼるが、ミルの場合その多くは当時の慣習に従って無署名または筆名であった。彼の用いた筆名は、A., A.B., M, J.S.M. などのようなものや、An Enemy to Religious Persecution, A Friend to Science, The Censor of the Judges など約20種にのぼる。それで彼が雑誌に発表したものを後に論文集(*Disser-tations and Discussions*, 4 vols, 1867, 1973)に収録したり、或は単行本にまとめたり(*Utilitarianism*, 1863; *Auguste Comte and Positivism*, 1865)した場合はよいが、雑誌に発表のままそれが自分の手になることを公けに確認していない場合には、種々の資料的裏付けによる考証によってはじめて、ミルの作品であることが判明するわけだ。ところがミルの場合そうした面倒な手続きを必要としない事情がある。ミルが自分の著作目録を用意しておいてくれたのであって、そのノートの発見と公刊とがミル研究者に大きな福音となった。*Bibliography of the Published Writings of John Stuart Mill*, edited from his manuscript with corrections and notes by N. MacMinn, J.R. Hains and J.M. McCrimmon, Northwestern University Press, 1945, reprint Ams Press, 1970. がそれである。

ミルは『自叙伝』の中で、自分の文章がはじめに活字になったのは経済学者トレنزの所有していた雑誌 *Traveller* への寄稿(1822)だったとのべた(岩波文庫、82ページ)のを皮切りに、1870年に執筆した終りに近い部分で「(1868年下院選挙に落選して)以来今日までに私は定期刊行物(主としてわが友モーリー氏の *Fortnightly Review*)にさまざまな論文を書き……」(同上、270ページ)とするすまで、自分の雑誌や新聞への寄稿のことを実に克明に語っている。上述の著作目録の三人の編者の一人が『自叙伝』のこうした叙述ぶりから推測して、ミルは自分の著作リストを手もとにおき、それを参照しつつ『自叙伝』の原稿を書いたにちがいないし、そのリストが今も残っているかもしれないと考え、それを探究している旨をロンドンの *Times Literary Supplement* に掲載した。その結果LSEが一括購入していたミル資料の中にそれとおぼしいノートがあることがわかり、若干の経緯の末、この著作目録の刊行となったわけである。

この目録にしたがって、ミルが寄稿した新聞・雑誌を最初に寄稿した日時順にひろい上げてゆくと、つぎの40種となる(*Parliamentary Papers* はのぞく)。このうちミルと最も関係の深かったの

はすでに見たように *Westminster Review* (*London Review*, *London and Westminster Review* をふくむ) である。

Traveller; *Republican*; *Morning Chronicle*; *Globe and Traveller*; *Lancet*; *Black Dwarf*; *Westminster Review*; *Parliamentary History and Review*; *New Times*; *Times*; *Parliamentary Review*; *British Traveller*; *Examiner*; *Le. Globe*; *Monthly Repository*⁽⁸⁾; *Tait's Edinburgh Review*; *Jurist*; *Globe*; *True Sun*; *Edinburgh Review*; *Phytologist*; *Spectator*; *Daily News*; *Frazer's Magazine*; *Sunday Times*; *Leader*; *Constitutional*; *Morning Post*; *Penny Newsmen*; *Our Daily Fare*; *Reader*; *Nation*; *Fortnightly Review*.

それ以外の雑誌についていくつか指摘しておく、(1)初期のミルは政治的急進派の雑誌 *Republican* や *Black Dwarf* にも寄稿しているが、J. Wooler の出していた *Black Dwarf* の誌上で彼と人口論争を展開しており、この点は他の機会に紹介した。(2) *Examiner* に寄稿するのは1830年のフランス7月革命論からで、翌1831年には有名な論文 *The Spirit of the Age* が同誌に連載される。其後もミルとの関係は継続しており、ミルが生前最後に寄稿した雑誌も *Examiner* である。(3) *Morning Chronicle* への寄稿は1823年1月から始まり、1853年までつづく。(4) *Frazer's Magazine* への寄稿は1850年1月にカーライルの見解を批判した *The Negro Question* が最初で、1862年のアメリカの北部を支持した論文 *The Contest in America* までつづく。(5) *Phytologist* への寄稿は1841年から1856年まで見られ、種々の地域の珍しい植物についての報告を寄せている。ミルはこの雑誌のことを *Westminster Review* (Dec. 1843) に紹介し、アマチュアの植物採集家に最適の雑誌だとはめている。

(1) 荒瀬豊「雑誌」『世界大百科事典』、平凡社；F.L.M., Periodicals, *Collier's Encyclopedia*, vol. 15, 1955；永島誠一『雑誌論入門』、吾妻書房、1965などを参照。F.L.M. は、新聞と雑誌とを区別するのは最終的には binding と cover とであるとのべている (*ibid.*, p. 549)。

(2) *Journal des Sçavans* については De Sallo (1626—69) の略歴をもふくめてつぎの文献を参照。Brown, H., History and the Learned Journal, *Journal of History of Ideas*, 33(3), July/Sept, 1972. なお本誌のアムステルダム版——それはパリ版にくらべて内容が豊富である——の復刻 (1665—1792) が1970年に Slatkine から出ているとのことである。

(3) 本誌の1～70巻の復刻版が Johnson および Kraus 社から1963～65年に出ている。

(4) 『西洋雑誌』全6冊は明治文化全集 (日本評論社) の雑誌編に収録されている。

(5) イギリス雑誌界の変遷を文芸雑誌を中心にたどった最近のものとして、出口保夫「イギリス文芸雑誌の発達」(1)～(7) (『英語青年』1983年4月—10月) がある。また大久保桂子「成立期のイギリス・ジャーナリズムにかんする覚え書き」 (『西洋史学』CXXIV, 1981) は、1695年の「出版法」の廃止から1760年代までのイギリスの出版情勢を展望した好文献である。

(6) 杉原「クラブ・レヴュー・大学」、『経済セミナー』 (日本評論社、1971年5月号、杉原『イギリス経済思想史』、未来社、1975年に所収) 参照。

(7) 「私自身はみんなの中で一番よく書いた人間で、2号から18号までに13編を寄稿した。歴史や経済学の書物の批評や、穀物條令、狩猟法、誹毀罪法など、特定の政治的課題をつかまえての論議などだった」 (『自叙伝』、岩波文庫、朱牟田夏雄訳、89ページ)。

(8) この雑誌へのミルの寄稿については、山下重一「J.S. ミルの政治的ジャーナリズム——『新聞ノート』 (1834年) について——」 (『国学院法学』第17巻第2号、1979年9月) を参照。

2. マルクスと雑誌

一般にある人物と雑誌との関係を考える場合には、彼が(1)読者、(2)寄稿者、(3)編集者であるという三つの点を取りあげる必要がある。例えばマルクスの場合なら、彼がどんな雑誌を読んでいたか、偶然にある一冊を見たのではなく、何号かを継続的に読み、そこから何かを吸収していた雑誌があったかどうか、というのが第一の問題だ。

マルクスが青年時代から読んだ書物の抜粋ノートを作っていたことはよく知られているが、そこに抜き書きされているのはほとんど単行本で、雑誌は極めてすくない。そのすくない雑誌の中の一つにロンドンで発行されていた週刊経済雑誌 *Economist* がある。⁽¹⁾『エコノミスト』は1843年にウィルソンが創刊したもので、1860年以降はバジョットが主筆となった。自由主義的な立場に立っているが、評論雑誌であるよりは経済に関する客観的な情報を諸統計によって正確に伝達することに力をそそいだ。そのことで大方の信頼を得て、イギリスのみならず国際的にも代表的な経済雑誌の地位を占め、現在に至っている。

マルクスが1849年にロンドンに亡命したあとも、共産主義者同盟の人々とともに革命運動をつづけるが、やがて彼等と袂をわかって政治活動を一時断念し、「飢餓の40年代」にかかわって「黄金の50年代」に入った客観状況の推移と展開を分析するべく経済学の研究を再開する。そしてリカードをはじめイギリスの古典派経済学の書物を理論的に研究する一方で、周期的恐慌の予測という基本視点から世界経済の現状を新聞や雑誌でフォローしてゆく。その資料としてマルクスが最も重視したのがこの『エコノミスト』であって、彼がこの雑誌をどんなによく利用しているかは、1850年代の時事論文や『資本論』第1巻での本誌への言及乃至そこからの引用によってあきらかである。

つぎにマルクスはどのような雑誌に寄稿しているだろうか。1844年にルーゲ批判の一文をよせた *Vorwärts* はパリで週二回発行されていたドイツ語の新聞だし、1852年から56年までマルクスがエンゲルスとともに寄稿した *The Peoples Paper* はチャーティストの E. ジョーンズが創刊した週刊紙である。1850年代にマルクスが最も多く寄稿したのは、*New York Daily Tribune* とプレスラウで発行されていた *Neue Oder Zeitung* であり、1860年代の前半にはウィーンで発行されていた *Die Presse* であって、イギリス国内の新聞や雑誌への寄稿はほとんどなかった。マルクスは1849年以来1883年になくなるまでロンドンに住んでいたにもかかわらず、イギリスのジャーナリズムとの直接のかかわりはうすかった。

だが1864年に国際労働者協会（第1インターナショナル）がロンドンで創立され、その総評議会にマルクスが関係するようになってからは、やや事情がかわってきた。第1インターの総評議会のメンバーにはイギリスの労働組合のリーダーたちも加わっていたので、マルクスの存在が、彼の第1インターでの指導力が高まるにつれて、イギリス労働界の人々にも意識されるようになる。そして *Beehive* とか *Commonweal* とかいった第1インターの力がある程度およんでいる労働界の雑誌にも彼の影響がでてくるようになる。彼が友人のエッカリウスに書かせたミルの経済学批判論文がコモウンウィールに連載されたのも、その一つのあらわれである。

1867年に『資本論』第1巻が刊行されたが、マルクスは本書がイギリスの労働者に読まれることを強く希望した。彼には世界革命の戦略的中心はイギリスだと考えられたからである。それには『資本論』の英訳が早く出なければならないが、その実現の機運を高めるためにも本書の書評がイギリスの雑誌にのる必要がある。こうしてマルクスにとってイギリスの雑誌への寄稿ということが

切実な問題として出てきたのだった。

前節で出てきた *Fortnightly Review* は、その点で有望な雑誌であった。なぜならそれへの有力な寄稿者にコントの影響をうけた実証主義者が何人かいたのだが、その一人であるビーズリーは、ロンドン大学の歴史学の教授であると同時に、1863年9月の創立大会の議長をつとめた第1インターの支持者でもあって、マルクスのことも知っていたからである。

そのビーズリーを介して『資本論』の書評を『フォートナイトリ・レビュー』の編集部を持ち込むことになったが、マルクスはその書評をエンゲルスに匿名で書いてもらいたいと思い、1867年10月19日づけのエンゲルスへの手紙でつぎのようにのべている。「すぐに君は『フォートナイトリ・レビュー』のために書評をひとつ書いてくれたまえ。ビーズリーがそれを持ちこむわけだ。これは、ロンドンで〔『資本論』の英訳を出版する〕出版屋をつかまえるために必要な予備手段なのだ」(MEW, 31, S. 370)。エンゲルスはその依頼に応じて1868年6月に書き上げてマルクスに送付、それはビーズリーから編集長のモーリーに送られた (MEW, 32, S. 124) が、モーリーは「イギリスの雑誌読者にはあまり学問的にすぎる」という理由でその掲載を断った (MEW, 33, S. 277)。そこでマルクスはビーズリーと相談して、『資本論』の内容を一般向きに書きかえ、それに彼の経歴やドイツでのこの本の影響をのべた序言をつけて『ウェストミンスター・レビュー』にのせることにし、序言の執筆をエンゲルスに依頼した (1868年10月15日づけの手紙, MEW, 32, S. 185)。エンゲルスはこれにも応じたが、結局これも実現するにいたらなかったようである。

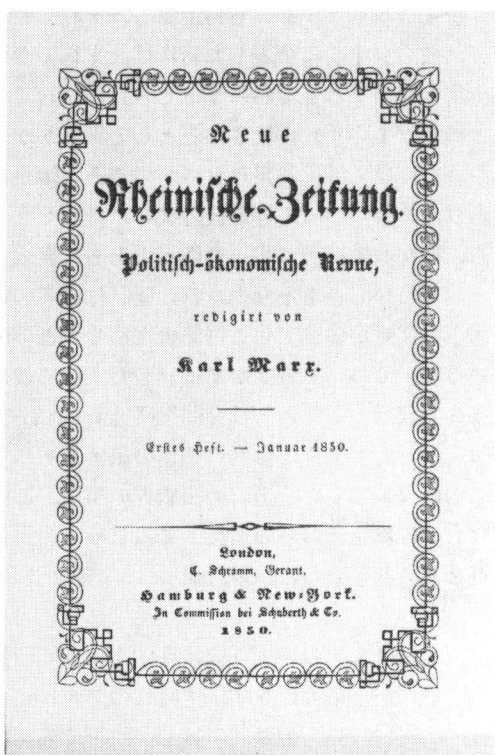
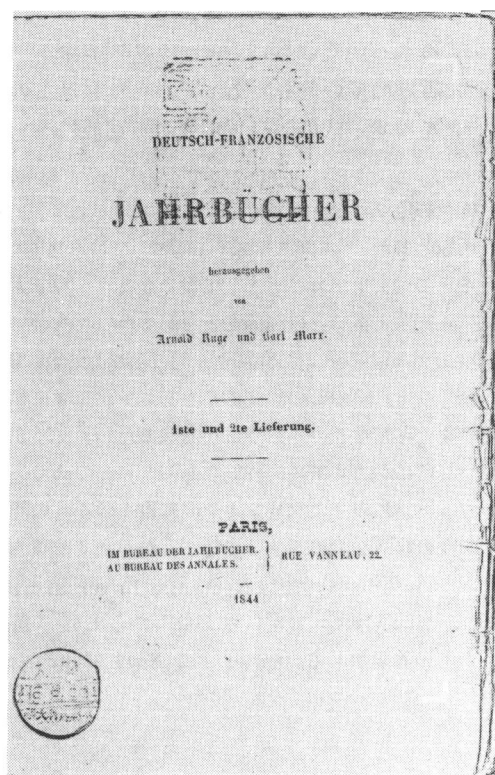
マルクスは『資本論』第2版の後記 (1873) で、イギリスの雑誌にのった唯一の『資本論』紹介として *Saturday Review* の1868年1月18日号をとりあげ、「私の見解に対してはことごとく敵意をもっている『サタデー・レビュー』は、ドイツ語初版の紹介の中でこう言った。叙述は『最も無味乾燥な経済上の諸問題にさえも一つの独特な魅力 (charm) を与えている』と」。この雑誌の当該号を見ると、この紹介は Reviews という欄の中の German Literature という項目のもとにとりあげられている22冊のドイツ書の一つとして書かれたもので、その全文はつぎの通りである。

Herr Marx is a political economist of the most advanced democratic school. In his eyes the capitalist is the enemy of the human species, and the wealth of the individual involves the misery of the mass. These opinions are obtaining some currency in certain orders of society, and, as it is therefore desirable that they should be thoroughly studied and comprehended, Herr Marx's work may repay attention. The author's views may be as pernicious as we conceive them to be, but there can be no question as to the plausibility of his logic, the vigour of his rhetoric, and the charm with which he invests the driest problems of political economy. His facts and illustrations, moreover, are chiefly derived from the social circumstances of England, where he appears to have resided for some years.

『サタデー・レビュー』にはミルは関係していないが、ミルの著書の書評はよく掲載されており (たとえば同年2月29日号には Mr. Mill on England and Ireland という長い書評がある)、ミルがこの雑誌に関心を持っていたことはたしかであろうから、『資本論』の書評に目をとめたこともありえないわけではなかろう。だがそれよりも可能性が高いのは、彼が『フォートナイトリ・レビュー』にのったラドロウやビーズリーの論文を読んだことであろう。キリスト教社会主義者ラドロウは、アメリカの南北戦争で北部を支持していることや協同組合運動の理解者であることやでミルが親近

感を持っている人物で、二人の間には文通もあるのだが、そのラドロウが『フォートナイトリ・レビュー』の1869年4月号に書いたラッサール論 (Ferdinand Lassalle, the German social democrat) の中にマルクスの名前が出てくるのである。⁽²⁾ただマルクスへの言及のしかたが問題で、ラドロウはラッサールとマルクスとの思想を全く同一視している。そこでマルクスはラドロウに手紙をおくり、この点を説明して彼の蒙をひらくとともに、『資本論』第1巻を贈呈した。またビーズリーの論文は第1インターナショナルを紹介したもので、その中にも当然マルクスが登場する。ミルが当時パリ・コンミュンとの関係で国際労働者協会に関心を持っていたことは事実であり、そのことを彼の知っているビーズリーが紹介しているとなると、これがミルの注目をひき、彼がその中に出てくるマルクスという名前を読んだとしても、決して不思議はないであろう。このように当時ロンドンで出ている新聞や雑誌を通じてミルがマルクスのことについてある程度の知識をえていたということは、十分考えられる。雑誌研究が思想史上にもっている意味をしめす一例といえよう。

マルクスと新聞・雑誌との関係を知るのに便利なのは、1934年にモスクワの M. - E. - L. - Institut から出た『マルクス年譜』(Karl Marx Chronik seines Lebens in Einzeldaten, 岡崎次郎・渡辺寛訳『マルクス年譜』, 青木書店, 1960) の索引のⅡ「新聞と雑誌」である。それには、年譜に出てくる新聞・雑誌のうちマルクスが関係を持ったもののタイトルに※印をつけてあって、(1)それが三つついているのはマルクスが編集したもの、または形式的にはそうでなくても実質上編集に強く影響したもの、(2)二つついているのは協力したものの、そして(3)一つついているのは寄稿したもの、という風に分類している。(1)に属するものはつぎの6点である。Deutsch-Französische Jahrbücher, Deutsche Brüsseler Zeitung, Rheinische Zeitung, Vorwärts, Neue Rheinische Zeitung, Neue Rheinische Zeitung Politisch=Ökonomische Revue. このうち雑誌は最初の『独仏年誌』と最後の『新ラ



イン新聞 政治・経済評論』の二点である。この二点はいずれも復刻されている⁽³⁾ので容易に全編に接することができる。ジャーナリストマルクスの側面の研究はマルクス研究の中でも今後にのこされた課題の多い分野であって、とりわけこの二つの雑誌の検討は、そこからマルクスの思想に新しい光を投ずる成果がひき出される可能性をもっているように思われる。

- (1) 杉原「ロンドン統計協会と『エコノミスト』」(『経済セミナー』1971年11月、杉原『イギリス経済思想史』所収) 参照。『エコノミスト』についての本格的な研究はないようで、今のところ小冊ながら創刊100年記念のつぎの論文集がガイドとして役に立とう。*The Economist a Centenary Volume*, 1943. なおつぎの文献はマルクスと本誌との関係を取りあつたもので、新メガ編輯上の産物である。Jones, L., Müller, W., Marx und der „Economist“. *Beiträge zu Marx-Engels-Forschung*, Heft 6, 1980.
- (2) ラドローのこの論文のことをエンゲルスに知らせた1869年4月15日の手紙の中でマルクスは「ラドローはまた非常なりカードウ崇拜者なのだが、ミルがなにもかもだいなしにしてしまった今日では、このリカードウ評価はもうすでに例外的なものだ」とのべている。同年6月10日の長女への手紙で『フォートナイトリ・レビュー』にのったソーントンの著書へのミルの回答に対する酷評(MEW, 32, S. 614)とともに、マルクスのミルの経済理論に対する姿勢がうかがえて興味ぶかい。
- (3) 『独仏年誌』の方はReclams Universal-Bibliothek Band 542, 1973. 『新ライン新聞』の方はRütten & Loening, 1955. いずれもDDRから出た。『新ライン新聞』の復刻版に序文を書いているKarl Bittelにはつぎの著書がある。Bittel, K., *Karl Marx als Journalist*. 1953.

3. 河上肇と雑誌

現在ミルもマルクスも河上肇も、それぞれ全集(ミルの場合は大規模な著作集)の出版が進行中で、彼らが生前に公表した著作は、書籍のかたちのものだけでなく、新聞や雑誌に寄稿したものも、全集が完結するとそれによって容易に読むことができるようになる。だが彼らが単なる一寄稿者たるにとどまらず、編集者などとして深くかかわった雑誌の場合は、全集でそれにのった彼らの文章を読むだけでは、物足りなさがある。編集者にとって、雑誌はある意味で全体として彼の作品であり、そこにのっている彼の文章だけがそうなのではない。したがってそこから彼の文章が抽出され、彼が他の場所に書いた作品とともに発表年次順または主題別に配列されて全集に収録されると、それがもともと発表された雑誌は読者の視野からおちてしまうことになる。河上肇全集では、河上の文章がのっている雑誌の性格や彼との関係について、解題や校注で説明するようにつとめているが、それにも限度がある。したがって彼がほとんど独力で大正8(1919)年から昭和5(1930)年まで刊行してきた『社会問題研究』(全部で106冊)の復刻版(社会思想社、1975—76)は、河上研究にとって全集とは別に独自の価値をもつものといえよう。⁽¹⁾この雑誌の装幀の変化、巻末の新刊広告に反映している当時の出版界の事情、それに余白のうめぐさに書いた河上の短文の含蓄、そうしたものは雑誌そのものに接してはじめてわかることである。河上が同人の一人として多くの文章を寄せた『我等』(大正8年創刊)の復刻(法政大学出版局、現在進行中)も、同じ意味で有益である。⁽²⁾

河上肇は郷里の岩国学校に在学中の少年時代に同人雑誌を編集しており、天性そうした才能を有していたが、⁽³⁾東大の大学院生時代のアルバイトとして二つの雑誌の編集に従事した。一つは東大の『国家学会雑誌』、他は瀧本誠一が主筆で貴族院の保守的なグループの後援で出していた『明義』であ

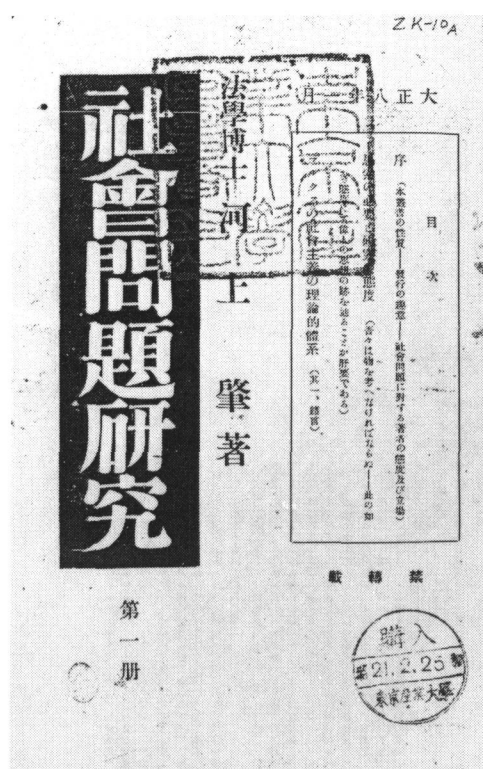
る⁽⁴⁾『国家学会雑誌』に河上は内外の新刊を紹介したり雑録で紙面をうずめたりして毎号かなりの量の文章を執筆しているし、『明義』には憲法関係の文章を寄せているが、いずれも編集の基本にかかわるものでなく、補助的な業務に従事したにすぎなかった。だがそうした経験は、やがて彼が雑誌の主筆として本格的な編集にあたることになった時に、すくなく役立ったことであろう。その雑誌とは、明治40年4月3日(神武天皇祭の日)に創刊された『日本経済新誌』である⁽⁵⁾

日本の経済雑誌は、明治10年までにすでに種々のものが見られるが、本格的な経済雑誌の第1号は田口卯吉が明治12年1月に創刊した『東京経済雑誌』であった。本誌が範としたのはロンドンの *Economist* で、自由主義を評論の基調にしたこと、物価・金融・貿易などの経済統計の充実につとめたことは両誌に共通するが、『東京経済雑誌』が外国の経済学説のわが国への導入に大きな役割りを果たしたことも見おとせない⁽⁶⁾。本誌の比重は明治の後半期に『東洋経済新報』(明治28年創刊)や『実業之日本』(同30年)など競争誌があらわれ、さらに主筆が田口の死(同38年)後乗竹孝太郎にかわってからはやや下ったとはいえ、明治末期まではやはりわが国を代表する経済雑誌の地位を保持していた。その『東京経済雑誌』に対し、また日清戦争後の新しい気運に乗じてあらわれた『東洋経済新報』——この『オリエンタル・エコノミスト』もやはり『ロンドン・エコノミスト』にならって基本的には自由主義の立場に立つものであった——に対し、日露戦争後の経済界の動向に呼応すべくスタートした新雑誌が『日本経済新誌』というタイトルを持ったのは、その国民主義・保護主義的性格を端的にしめすものであった⁽⁷⁾。

河上は明治39年に読売新聞社に入り、新聞の経済欄を担当したが、その経験は『日本経済新誌』の編集と執筆に大いに役立ったにちがいない。恩師横井時敬の主宰していた『日本農業雑誌』の常連の寄稿者の一人だったこともまた同様である⁽⁸⁾。彼が『日本経済新誌』の主筆だったのは京都帝大に就職する明治41年秋までの1年半にすぎなかったが、その間に彼は毎号いくつかの社説を書く⁽⁹⁾とともに、『東京経済雑誌』と米穀関税問題で論争するなど、健筆を揮ってはなばなしい活動をした⁽¹⁰⁾。本誌は彼のあとをうけた永野八郎らによって大正ななかば頃まで存続するが、この雑誌の研究は、河上研究にとってのみならず、わが国の経済雑誌史の一齣としても、今後にのこされた課題である。

京大に移ってからの河上は、その機関誌たる『京都法学会雑誌』の他に当時のわが国の代表的な経済学雑誌である『国民経済雑誌』や『三田学会雑誌』などにも寄稿するが、1915(大正4)年に『経済論叢』が創刊されると、本誌の育成のために努力し、それが学界で確固たる地位を占めることに貢献した⁽¹¹⁾。だが『貧乏物語』で文名をあげ、さらに社会主義の研究と普及に意欲をもやす河上にとって、こうした学術雑誌の他により自由に幅広く活動しうることができれば専属の舞台を持つことが必要とされた。この必要性はいわゆる白虹事件で友人の長谷川如是閑らが朝日新聞社を辞し、河

社説	地方税附加の改正に就て 日清戦後問題の成立を望む 米穀輸入税の改正 労働契約の改正 労働契約の改正	河上
論説	外貨貿易の方針 日本銀行の準備金 日本銀行の準備金 日本銀行の準備金	金子堅太郎 松本謙之助 横井時敬
研究資料	我が國今日の経済的地位 我が國今日の経済的地位 我が國今日の経済的地位	河上
雑録	世界各國の貿易統計 世界各國の貿易統計 世界各國の貿易統計	河上
海外思想	海外思想の動向 海外思想の動向 海外思想の動向	河上
海外経済時事	英國の貿易 英國の貿易 英國の貿易	河上
内閣経済時事	内閣の経済政策 内閣の経済政策 内閣の経済政策	河上
新刊批評	新刊批評 新刊批評 新刊批評	河上



上自身も朝日と絶縁するにいたった1918年に一層強まった。そこで櫛田民蔵と小島祐馬とが弘文堂とはかって河上のために用意した舞台が彼の個人雑誌『社会問題研究』だったわけである。⁽¹²⁾

10年以上の誌歴をもつ『社会問題研究』の軌跡は、社会主義者としての姿勢で出発はしたものの当初はなお人道主義的色彩の濃かった河上が漸次マルクス主義者に変貌してゆく過程にはほかならないが、「マルクスの社会主義の理論的体系」という最初の連載と「唯物史観の自己清算」という末期の連載とを比較すると、その変化は一目瞭然である。だがその間の河上の足どりをよりくわしく誌面にそってたどってゆくと、多くの問題が生じてくる。そしてこの河上の思想的変化は、福田徳三はじめ多くの人々との間の論争とからまりながら展開するのであって、そのことは本誌が大正中期から昭和初期にかけてのわが国の社会科学史乃至社会思想史の貴重な記録でもあることをしめしている。その意味で本誌は今後種々の角度からの検討と分析がなされることを待っているといつてよい。

天野敬太郎『河上肇博士文献志』（日本評論社、1956）には、「河上肇博士論文掲載雑誌一覧」がおさめられている。論文のみならず随筆などを、また雑誌のみならず新聞をもふくめた意味の一覧で、40点——そのうち新聞が6点、英文雑誌が1点ふくまれている——が列举されている。このリストで主要なものはわかるが、その後の資料調査で河上が寄稿した定期刊行物の状態が一そうはつきりした。現在進行中の河上肇全集では、第1巻から第19巻までは著作を発表日時順に収録する方針がとられており、その部分はすでに完結したので、そこに収録された新聞・雑誌をひろってゆくと、前掲の天野のリストを増補した「一覧」がえられる。つぎにそのリストを、まず新聞と雑誌とにわけ、さらに後者は明治・大正・昭和の三期にわけてかかげよう。

新聞

赤旗、東京朝日新聞、大阪朝日新聞、大阪毎日新聞、読売新聞、防長新聞、労働農民新聞、新広島、戦旗、新神戸・労働者新聞、萬朝報、京都帝国大学新聞、京都日日新聞、労働新聞、沖縄毎日新聞、琉球新報、長周日報、紀伊新報。

このうち河上が編集にかかわったのは読売新聞と労働農民新聞とである。また大阪朝日新聞については、大正初年から大正7年まで社友として相談にあずかったと思われる。赤旗の編集にも意見を持っていたが、関係しないうちに検挙された。

雑誌（河上が最初に寄稿した時を基準に三期にわけた）

明治 京都法学会雑誌、国民経済雑誌、三田学会雑誌、経済世界、国家学会雑誌、財界、産業組合、史学雑誌、太陽、実業世界太平洋、地球、明義、日本経済新誌、日本農業雑誌、中央公論、中央農事報、町村自治、実業世界、実業之世界、火鞭、女鑑、衣笠蚕友会報、警世、水声、郷友会報、講農会会報、無我の愛、ムラサキ、内外教育評論、農業教育、野の声、労働世界、新人、滋賀県教育会雑誌、社会学雑誌、志きしま、近畿時論、東京経済雑誌、和融誌、関西学報、明治学報、税務

行政、筆の零。

大正 経済論叢, *Kyoto University Economic Review*, 改造, 解放, 社会及国体研究録, 社会問題研究, 商業及経済研究, 政治学経済学論叢, 大学評論, 中外, 東方時論, 日本一, 我等, 法政論叢, 大学及大学生, 学友会誌, 国民講壇, 救済研究, 農政研究, 労働共済, 労働文学, 社会改良, 週間朝日, 新時代, 新日本, 新社会, 新小説, 雄弁, 泉。

昭和 学生の旗, 働く婦人, 女人藝術, 批判, 法律戦線, 交通労働者, 東洋経済新報, 教育評論, 問題, 林檎, 日本輿論, 産児制限評論, 社会運動通信。

このうち河上が編集したのは『日本経済新誌』と『社会問題研究』とで、『無我の愛』と『明義』と『経済論叢』と『日本農業雑誌』と『我等』とは編集にある程度のかかわりを持ったものといえよう。また上記の雑誌のいくつかは、河上が他誌に発表した文章を転載しているもので、それが河上の承認をえたうえのことかどうかはさだかでない。『東洋経済新報』が昭和に入っているのは、河上がそれに寄稿したのは昭和7年2月13日（「金本位制破壊の意義」）だからである。なお河上の死後遺稿を掲載した雑誌名のはのぞいてある。

最後に河上肇がイギリス古典学派の研究資料として学者の著書を取りあげるにとどまらず、当時の雑誌にも注目していたことをのべておきたい。彼がヨーロッパ留学から帰った翌年の1916（大正5）年に、京大でマルサス生誕150年記念行事がおこなわれ、『経済論叢』も特輯号（第2巻第5号、1916年1月）を出すのだが、河上はその号に「マルサス人口論要領」を書くとともに、『「エディンバラ・レビュー」及び「クォーターリー・レビュー」中マルサスに関係ある主要の論文及び記事」という文献目録をのせている。『人口原理』をめぐる思想界の動向をたどるには、単行本のみならず当時の雑誌を視野に入れなくてはならないことを河上は理解していた。ウィッグとトリーとの二派を代表する二つの『レビュー』を舞台にマルサス論争がどのように展開されたかという問題を、河上自身は手がけなかったが、そうした研究のための礎石の一つを、こうした文献目録を作成することでわが国の学界に彼は置いたのである。

- (1) 復刻版は全12巻の他に別巻があって、それには天野敬太郎氏の手になる種々の索引がのっているが、それはこの雑誌を研究するうえにきわめて有益である。
- (2) 雑誌ではないが『京都帝国大学新聞』の全巻復刻も河上研究にはありがたい事業であった。河上はこの新聞にそれほど多くは書いていないが、彼の身边が急をうづめはじめる1926年から大学を辞する1928年にいたる間の京大の学内事情、たとえば彼が顧問をした社会科学研究会の動向などがよくわかって興味ぶかい。
- (3) 少年河上の編集した会報——彼はその発行の辞を書くのみならず、表紙の絵や余白をうずめるカットまで描いている——は、全集第21巻（1984年2月）の別編にはじめて紹介された。
- (4) 河上と『明義』との関係については明治35年8月28日の父あての手紙（全集第24巻301-302ページ）



を参照。

(5) 河上が『日本経済新誌』の主筆になった事情や本誌の性格については、明治40年2月25日の父あての手紙（全集第24巻331-334ページ）を参照。『明義』の場合でも『日本経済新誌』の場合でも創立事情はこの手紙ではじめてあきらかにされた。手紙はそうした雑誌出版という多くの人々が関係する一つの事業の裏面史についての重要な情報源である。この点はミルやマルクスの場合でも同様のことがいえよう。

(6) 『東京経済雑誌』については杉原『西欧経済学と近代日本』（未来社、1964年）参照。なお本誌の全巻復刻が日本経済評論社から刊行中である。一時同誌のライバル誌だった犬養毅の『東海経済新誌』（明治13-14年）の全巻復刻も同社から刊行されている。

(7) 杉原四郎・一海知義『河上肇 学問と詩』（新評論、1979年）108-111ページ参照。

(8) 杉原『『日本農業雑誌』と河上肇』（杉原『日本経済思想史論集』、未来社、1981年所収）参照。

(9) 社説は河上の署名のあるものと無署名のものがある。後者のうちいくつかは前後の関係で彼の執筆と断定することができるが、それが困難なものもある。

(10) 河上肇全集第3巻の解題（大野英二）を参照。

(11) マルサス生誕150年記念号（大正5年1月）やスミス生誕200年記念号（大正13年1月）の編集は、経済学史の講義の担当者としての河上がこれに当り、いずれも充実した誌面を構成した。

(12) 「柳田民蔵君にあたえた手紙」の河上による解題（全集第24巻75ページ）参照。

4. 思想家の研究雑誌

ミルは1873年5月8日に南仏のアヴィニオンで病没するが、間もなく生前彼と関係の深かった *Examiner* が追悼号を刊行、フォーセットやスペンサーら彼の友人10人が、多面的なミルの諸業績をしのんで執筆している。10年おくれでマルクスが1883年3月14日にロンドンでなくなったが、彼のために追悼号を出した雑誌はおろか、新聞や雑誌にのった追悼や死亡記事もそれほど多くなかった。⁽¹⁾ところが最近では事情が全く逆転して、『資本論』刊行100年の1967年やマルクス生誕150年の1968年や没後100年の1983年には、雑誌の特輯号のみならず記念出版物の刊行がさかんであるのに反し、ミルの方は記念の年がきても非常に淋しい。私の知る限り1956年の生誕150年に関西大学の『経済論集』が、また没後100年の1973年に『思想』が特輯号を出しているが、⁽²⁾これは世界でもきわめて稀なケースである。河上肇が1946年1月30日に京都で衰弱死した時には、戦後早々のことで雑誌の出版もまだ軌道にのっていなかったが、二三の雑誌がいくつかの追悼文を掲載した。1979年の生誕100年には、『経済論叢』（京大）や『思想』が本格的な特輯を組んでいる。

思想史を対象とする研究雑誌としては、外国では *Journal of the History of Ideas* (1940-)、わが国では『日本思想史研究』(1967-)、社会思想史学会の機関誌『社会思想史研究』(1977-)などがある。思想史は一方では科学史、他方では運動史と密接に関係するので、前者の面では *History of Political Economy* (1969-) や『経済学史学会年報』(1963-) や『科学史研究』(岩波書店、1941-)などを、後者の面では *International Review of Social History* (1936-) や *Beiträge zur Geschichte der (deutschen) Arbeiterbewegung* (1959-) などをも見る必要がある。それにしても思想史の研究雑誌はすくない。だが特定の思想家を対象とした雑誌は意外に多く、トーマス・モア、カント、ヘーゲル、ゲーテ、ルソー、パレート、キェルケゴールなどについては毎年本格的な研究年報が出ている。また *News letter* といったハンディなかたちで年数回刊行されているものもある。1978年に20年ぶりでロンドン大学を訪れたとき、中央図書館の雑誌室でトーマス・ペインについ

ての *Newsletter* が置かれているのを発見した。ベンサムやカーライルやラスキンやモリスらについても現在こうしたかたちのものがイギリスで刊行されているようだが、⁽³⁾ トロント大学のロブスン教授から出している *Mill News Letter* (1963-) もその一つである。

Robson 教授は現在トロント大学から刊行中のミル著作集 (*Collected Works of John Stuart Mill*) の編集長で、実質的には全集ともいえる数十巻の著作集に精力的に従事している。わが国ではよく全集の各配本に月報がはさみこんであるが、ある意味でこの *Mill News Letter* は『ミル著作集』の月報にあたるものといえよう。もっとも著作集の配本は決して毎月ではないので、*News Letter* の方もそのペースに応じて年2回の刊行 (最近号は vol. XIX, No 1, Winter 1984) である。ミルの新資料の紹介や研究ノートや新刊書の書評や著作集の進行状況などがのっていて、ミル研究者によろこばれている。

それではミルやマルクスや河上肇についてわが国でそうした研究雑誌は出ているだろうか。ミルについては1975年に創立されたミルの会が年報を出している (1980年創刊、編集由良君美)。内容は *Mill News Letter* にくらべるとまだ貧弱だが、今年3月に刊行される第5号は、明治時代のミル導入史の特輯号の予定である。マルクスについては、1983年に十数種の雑誌がマルクス特輯号を出した日本なのに、マルクスを対象とした雑誌は不思議にない。戦前の『マルクス主義』も戦後の『マルクス・レーニン主義研究』も運動論的・現状分析的性格が強く、思想史的研究雑誌ではない。河上肇については二つの会の会報、すなわち『東京河上会会報』(1961年創刊、第52号、1984年1月) と『河上肇記念会会報』京都、1975年創刊、第12号、1984年2月) とがあり、会員の河上研究や資料紹介をのせている。

私は先年この種の思想家を対象とする研究雑誌が日本でどれくらい刊行されてきたかを調査し、そのリストを『社会思想史研究』にのせたことがある。⁽⁴⁾ 雑誌の発行形式には、一人が謄写刷・経費自弁で出す個人雑誌から商業出版社が市販するものまでさまざまあり、その内容も自分の生き方との関連で思想家との対話を記録するものから専門的学術雑誌までいろいろであるが、そうした雑誌が雑誌として存在した (つまり1号で終らなかった) ということ自体がその思想家に対する関心が決して個人的・瞬間的・偶然的なものではないことのあかしであり、したがってそうした雑誌が発行されたことが思想史的に見て無視できぬ意味をもつ現象ということになる。つまりそうした雑誌の調査によって近代日本思想史の一面が照し出されないものかというのが、この調査のねらいであった。⁽⁵⁾

現在までのところ日本人・外国人それぞれ約40人についての雑誌が出ており、福沢諭吉 (3種)、田中正造 (3種)、魯迅 (5種) のように一人について複数の雑誌が出ていることもあるので、点数ではそれぞれ約50点、合計約100点の思想家研究雑誌の存在を確認している。⁽⁶⁾ その場合問題なのは文学者の研究雑誌をどの程度ひろうかということで、日本人では紫式部、芭蕉、田山花袋、太宰治、斎藤茂吉などははぶいたものの、森鷗外、与謝野晶子、久保栄、宮沢賢治などは迷った末一応おとし、石川啄木、尾崎士郎、島崎藤村、中里介山は採録した。また外国人ではクロード・ド・レーン、シェクスピア、ソーロー、ダンテ、ドストエフスキー、トルストイ、ロマン・ロラン、ブレイクとホイットマンなどは採ったが、イギリスのウルフ、ロレンス、ワイルドらはおとした。このような採択規準は的確なものではないので、すこしゆるめると雑誌の点数が二割ぐらひはすぐ増加するであろう。

こうして作成された研究雑誌のリストを手がかりに、日本の思想史へのアプローチを試みることは今後の課題だが、さしあたり気づかれることのいくつかをあげておこう。(1)これらの雑誌のうち

戦前に発行されたものは全体の約一割にすぎない。渋沢栄一（『龍門雑誌』、現在は『青淵』と改題）と徳富蘇峰（『蘇峰会誌』、現在は『民友』と改題）とには彼らの生前から尊敬する人々の集団があり、戦前にすでにその機関誌が発行されていたのである。外国人のものでは『トルストイ研究』（1916—1919、全29冊、トルストイ会編集、新潮社発行）が最も古い。広津和郎、島村抱月、生田長江、徳富蘆花、秋田雨雀、武者小路實篤、阿部次郎、安部磯雄、昇曙夢といった多彩な執筆陣で、トルストイに限定せず、ドストエフスキーやツルゲーネフの特輯号も出しており、当時の思想界の一面がよくうかがえる。(2)戦後に発行された雑誌は、一方では『福沢諭吉年鑑』（1974—）、『季刊柳田国男研究』（1973—1975）、『キェルケゴール研究』（1963—）、『ダンテ学会誌』（ダンテにかぎらずマキアヴェリやペトラルカからもとりあげられている。1951—）のような学問的研究雑誌があると同時に、他方では『トインビー市民の会会報』（1968—）、『魯迅』（魯迅友の会会報、1954—1979）、『経験』（ルソー研究会、1974—）などのような、専門家でない人々が執筆しているものがある。こうした雑誌の出現に社会思想の戦後段階の特徴がしめされているといっていよう。(3)雑誌でとりあげられているアジアの思想家は、タゴール（長崎タゴール研究会編『タゴール』、1959—1965）、毛沢東（『月刊毛沢東思想』、1968—1975、他に2種）、金日成（『キムイルソン主義研究』、1977—他に1種）および魯迅の4人である。最近関西で孫文研究会が発足したが、それが機関誌を発行するようになれば、もう一人加わることになる。このようなアジアの思想家への注目もまた戦後の特色の一つにかぞえ得るだろう。

(1) 1895年にエンゲルスがロンドンで死んだ時は、イギリスのアカデミックな経済学雑誌 *Economic Journal* (Sept., 1895) は、彼の追悼文を掲載し、その中でエンゲルスの青年時代の著作『イギリスにおける労働者階級の状態』のことにふれている。

(2) 私はこの二つの雑誌の編集者にミル特輯を提案し、それぞれに一文を寄稿した。なお関西大学の『経済論集』は当時シカゴ大学にいたハイエクに送られたが、彼はそれについて天野敬太郎氏のミル文献目録に注目し、ミル著作集の『初期書簡集』Iの序文の脚注で紹介している (*Collected Works*, XII, 1963, p. XVI 参照) また私は1973年トロント大学で開かれたミル国際記念集会の文献展示場にそれを出品したが、山下重一教授の出品された中村正直訳『自由之理』——これはミルが在世中の1872年に出版された——とともに、日本におけるミルへの関心の高さを示すものとして参会者の注目をひいていた。

(3) 木村正身氏の御教示によれば、*The Ruskin Newsletter* が The Ruskin Association (1969年設立) の機関誌として1969年秋に創刊され、年2回刊行（ただし最近おくれ気味）、J.S. Dearden の編集で、ラスキン関係の出版・集会などの情報を提供しており、William Morris Society (1955年設立) の機関誌として、*The Journal of the William Morris Society* (1962年夏創刊、年2回刊、論文、通信、書評などをのせるが、最近発行が不規則となる) とともに、会員向けの *Newsletter* が年2、3回出ているとのことである。

(4) 杉原四郎「特定の思想家（日本人）を主題とする研究雑誌目録」、『社会思想史研究』第5号、1981年9月；杉原四郎・杉原達「特定の思想家（外国人）を主題とする研究雑誌目録」、同上第6号、1982年9月。

(5) 特定の一思想家を対象としたものではないが、ある思想に属する人々を研究する日本の雑誌として、保田与重郎や蓮田善明らを取りあげる『日本浪漫派研究』（1962年創刊）とキーツ、コールリッジらを対象とする『イギリス・ロマン派研究』（1972年創刊）がある。

(6) 『社会思想史研究』にリストをのせて以後管見に入った雑誌を二三補充しておこう。日本人では教育思想家の『沢柳政太郎研究』（1963—1975）、民間娯楽研究の先駆者『権田保之助研究』（1982—）、スペイン市民戦争への参加者『ジャック白井研究』（1982—）。それから「ヒュームとスミスの会」と「マックス・ウェーバーの会」とが簡単な会報を発行している。

（甲南大学経済学部教授）

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 7*

発行所 東京都国立市中 2-1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 1984 年 3 月 31 日

印刷所 東京都日野市多摩平 1-3-7

有限会社 新英商会
